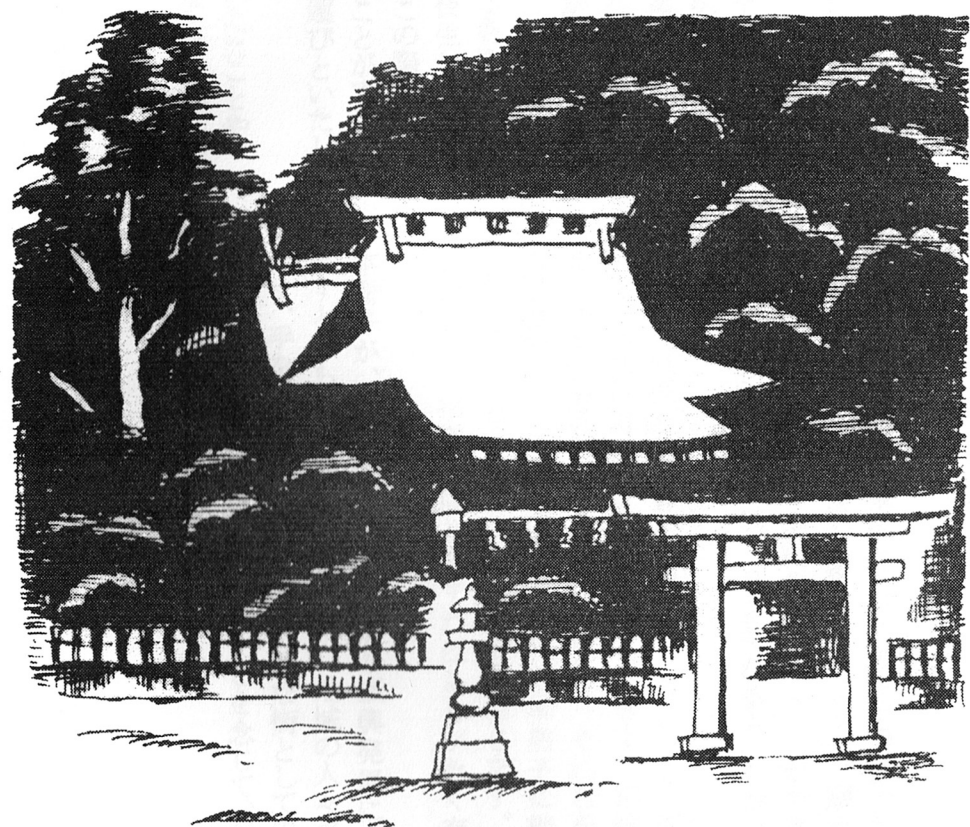


瀬戸神社の

天王祭



瀬戸神社

はじめに

このたび「瀬戸神社の天王祭」と題して小冊子を刊行することとしました。

これは中田勇一君の編集後記も参照していただきたいと存じますが、同君が川町内の中里健次郎さん、中里彦一さんの書かれた「か組・天王祭六浦連合祭の思い出と余話」と渡辺正治さんの原稿を、ぜひ活字にしてはと社務所に相談にやつてこられたのがきっかけとなりました。

今日、天王祭りの運営の中心になっている各町の祭礼委員や神輿関係者の多くが戦中または戦後生れであり、戦前まで行われていた天王祭の姿を、ぜひこの際これらの皆様をはじめ、多くの方に知っていただくことができると、同君の御尽力に甘えながら印刷の運びといたしました。

宮司が、先代・先々代の宮司から聞き伝えたことや、神社の記録などから、補足の原稿を書き足して、編集いたしました。今回は瀬戸神社の「天王祭」のことに絞った内容に致しました。

瀬戸神社に關しましては、「天王祭」以外にも「鎮座

の歴史」「文化財」「御祭神」その他書きとどめ、皆様にお読みいただきたい事項も多々ありますが、順次これらを手軽な小冊子に分割編集していくことができれば、本冊子はそのシリーズの第一号ともなるものと存じております。

また、今回採り上げた、中里さん・渡辺さんの原稿以外にも、また川町内以外の町内にも、貴重な記録や資料をお持ちの方もあろうと存じますが、それらを御紹介・御披露いただけるものなら、これも本冊子に継続するシリーズのひとつに加えて行けるとも存じます。

御紹介、ご指導を賜りますればありがたく存じます。

本冊子が、天王祭の今後の一層の振興発展につながりますとともに、「まつり」を通じて、地域の人々が心を通わせ、手を携えて、豊かな町、平穏な街として未来を築いてゆくことの基盤となりますことを念じて、刊行の御挨拶といたします。

平成十四年七月七日

瀬戸神社

宮司 佐野 和史

瀬戸神社の天王祭

瀬戸神社宮司 佐野 和史

瀬戸神社恒例の祭り

天王祭の特色

天王祭のはじまり

祇園祭と天王祭

午頭天王について

茅の輪と武塔神のものがたり

水を守り、田を守る神さま

昭和初期までの天王祭

三ツ目神楽の笹だんご

戦後の天王祭復興

昭和三十年代の天王祭

金沢扇會の結成と神輿渡御の復興

天王祭の現状と今後

三ツ目神楽

天王祭の日程
連合祭

各村の屋台の駐車所
木やりと囃子について

代々の囃子方

代々の木遣り師

屋台の建造について

しやち

瀬戸神社の天王祭についての追憶

渡辺 正治

天王祭の始まり

五ヶ村合同の天王祭

瀬戸神社の氏子

天王祭実施にあたっての約束ごと

屋台や山車など引き物の変遷

思いついたまま

木遣りの導入

木遣りの種類

町内における稽古場と稽古の仕方

瀬戸神社の天王祭

瀬戸神社 宮司 佐野 和史

瀬戸神社恒例の祭り

瀬戸神社の恒例の祭の主要なものを挙げると次のようになります。

◎三月春分の日

祈年祭・合祀神例祭(春祭り)

◎五月十五日

例祭・琵琶島神社おわたり行事

◎七月七日〜十四日

(これに近い日曜日〜日曜日の八日間)

天王祭(夏祭り)

◎十一月二十三日

新嘗祭(秋祭り)

この中で、七月の「天王祭」について簡単に解説をしてみましよう。

天王祭の特色

天王祭が他の祭りと異なる特色は、神社を出発した神輿が氏子町内を限なく巡幸することと、それに併せて氏子町内の山車や屋台、大人や子供の神輿がくりだされる町内挙げての祭りであることでしょう。また、祭礼当日一日だけの行事でなく、八日間という期間のある祭りでもあります。(町内によっては、最終の土曜日・日曜を宵宮と本祭りとして二日間で行っていますが、昔からの慣例のある町内は八日間の行事として行います。)

山車や屋台では、各町内で伝承するお囃子が演奏され、木遣りに先導されて子供達が曳き綱を引いて町内を廻ります。瀬戸の山車には桃太郎の人形が乗っています。人形山車は全国的にみれば各地に例がありますが、横浜・湘南近辺や首都圏ではめずらしいものです。

天王祭のはじまり

瀬戸神社の天王祭がいつから始ったかについては、明確な文献などの記録がないのではっきりとは言えません。今日も使用されている神輿や山車・屋台は江戸時代後期の作製とみられ、現在のような姿で祭りが行われる

ようになったのはその頃で、少なくとも二百年は続いている祭りであると言えるでしょう。

しかし、天王祭の中には、湯立神楽のような鎌倉時代に遡る要素もあり、さらに古い起原を想定することも否定はできないでしょう。

この祭りは大名・武家衆の差配するまつりでなく、百姓衆・町衆のまつりとしての特色をもっています。このことから、瀬戸・六浦・川・大道・三艘などの町内が、住民の自治的な機能をもつようになった頃に始つたものでしょう。それは戦国乱世が終り、徳川家康が江戸に幕府を開いて、金沢周辺も安定し、関西方面から江戸への海路交通も盛んになって、六浦湊も賑つたであろう江戸時代初期にも遡るものかもしれません。さらに、それ以前の小田原北條氏の支配した時代、あるいはそれ以前であつても、海上交通の要所であり鎌倉にも近い金沢には、都の文物の伝播もありましたから、六浦惣村が郷村としての機能をもつようになったからであろう室町時代の頃に何等かの起原を求める可能性も残されていると思われまふ。

祇園祭と天王祭

都の文物の伝播が天王祭の起原とどういう関係があるのかというと、「天王祭」の起原は京都の八坂神社の祭りであり、京都三大祭りとして賀茂神社の「葵祭り」、平安神宮の「時代祭り」とならんで有名な「祇園祭り」にあるからです。祇園祭りの起原は平安時代の御霊會という行事に遡るといわれますが、今日のような祇園囃子にあわせての山鉾はじめ各種の屋台の巡幸が行われるような形が出来上がったのは、室町時代のことです。応仁の乱で都が焼野が原の状態のなかでも、祭りを伝承した京都の町衆や神主の心意気が今も京都の人々には語り伝えられているとことです。そして、この形式の祭りが、その時代に、全国各地に伝播しました。祭り囃子や衣裳などが、今日でいえば流行の音楽やファッションが全国に広まるように、流行の祭りとなりました。

当時、音楽やファッションなどの流行を「ふりゆう」（風流・浮流）と称しましたが、六浦湊の人々もいち早くこの流行を取入れたに違いありません。

午頭天王について（「ずてんのう」）

明治維新に神仏分離が命じられる以前は、多くの神社・仏閣は神仏習合の信仰があり、その思想に基き、祭りの行事が行われていました。

京都の八坂神社も当時は祇園社と称し、感神院という名の寺院がその中心でした。その起原は、新羅の午頭山に祀られていた素戔嗚尊（スサノヲノミコト）の神霊を八坂臣の祖先がお遷ししたとも、播磨の広峰に祀られた午頭天王を遷したとも諸説がありますが、神仏習合思想の下で、祇園精舎の護り神という午頭天王と、日本古来の神である素戔嗚尊とが同一の神の別名、あるいは変化した姿と考えるもので、「祇園さん」「天王さま」と呼ばれて信仰されました。そして京都では、疫病を始めとする災厄から守ってくれる神さまとしてこの「祇園さん」「天王さま」を祀る行事として「祇園祭り」が始つたのです。

茅の輪と武塔神のものがたり

さらに、素戔嗚尊には次のような伝承もあります。それは、「備後国風土記」という書物に記されているも

のです。

昔、蘇民将来（そみんしょうらい）と巨旦将来（こたんしょうらい）という兄弟がいました。兄の蘇民は貧しい暮らしをしていましたが、弟の巨旦は金持ちでした。あるとき武塔神がみすばらしい姿で宿を借りたいと訪ねてきました。巨旦は断りました。蘇民は貧しいながらも親切にもてなしました。武塔神は蘇民の家族に茅の輪を腰にさげるように教えました。後に疫病が流行ったときに蘇民の家族や子孫はみな助かったということでした。

このものがたりの武塔神というのは素戔嗚尊の別名だと書かれています。

このことから、天王祭は、病気をはじめ、人間の悩み、苦しみを祓い清めて下さる神様に、氏子町内を御神輿で巡幸いただく趣旨のまつりであることを知る事ができます。

瀬戸神社では、六月末日の大祓行事と、それに続く七月の天王祭に、御祭神の御神徳を頂戴する御印に「茅の輪」守りをお頒かちします。天王神輿を担ぐ時など腰に下げて、身の守りとしていただき、また、家の門

口などにまつり、災厄消除 招運來福のお守りとなさつて下さい。

水を守り、田を守る神さま

しかし、以上のように、天王祭を夏の疫病除け、災厄除けのまつりとのみ理解する事は一面的な見方に過ぎます。

天王祭にはもう一つ重要な意味が込められています。それは、「水」のまつりということです。古代から稲作を中心に生活をしてきた日本人にとって、「水」は非常に大切な天の恵みです。ことに、稲が成育し、開花し、穂を出す時期に水田には多量の水が不可欠です。真夏には、日照も水も両方必要です。

大昔から、日本人は真夏の水の恵みを水を司る神々に祈ってきましたが、天王祭にはこの伝統も受け継がれているのです。

かつて、瀬戸神社の天王祭の御神輿には、キュウリがたくさんお供えされたそうです。キュウリは河童の好きな食べ物として知られていて、キュウリの海苔巻は河童巻ともいわれます。

河童は、今日では愛敬のある妖怪の仲間ように見られますが、民俗学ではこれは古い時代の川の神、水の神の姿が変化して今日に伝承されたものと考えられています。

八坂神社の御神紋は「木瓜」ですが、これはキュウリを輪切りにしたときの形を紋章に図案化したもので、水のまつりとのつながりはこのことにも類推されます。

キュウリに限らず、瓜(うり)の類に関する伝承には、瓜子姫の話や、中国の天の川伝説に語られる瓜など、水に因む話が多くあり、それらは日本に限らずアジアやオリエントに拡がっています。

これらを探ってゆくと、河童と天王祭と素戔嗚尊についても、人類発生以来の遠い信仰にまでゆきあたるのかもしれない。夏祭りのロマンはそんなところにもあります。と同時に、こうした水の神信仰と結つく天王祭の性格に、江戸時代以前に遡る歴史を感ずることもできるのです。

昭和初期までの天王祭

今日では、天王祭は本来の祭日に近い日曜日を選んで行われますが、本来の祭日は曜日には関係なく七月七日から十四日でした。

そして、本社の祭礼というより、氏子惣中による民間行事としての夏祭り、瀬戸・六浦・川・大道・三艘の、いわゆる五ヶ町が中心となつて行われ、これに併せて瀬ヶ崎、室ノ木、また高谷などでも同様に行われました。祭りの「触れ元」は川の村役が当たるのが例であったという事です。

七月七日午後、五ヶ町の祭り役人参列の下で、本社に祀られる素戔嗚尊が「天王さま」として御神輿に遷座されます。これが出御祭です。

(瀬戸神社の主祭神は大山祇神で、三島明神とも称されます。御本殿には、これに配祀という形式で素戔嗚尊の御神体がお祀りされ、この御神体が、天王神輿に、お遷りになるのです。因に、五月例祭の琵琶島神社おわたり行事の時に御神輿にお遷りになるのは、主祭神である大山祇神の御神体です。)

この天王神輿は、五ヶ町の共有の神輿として扱われて

いたということです。

「天王さま」が御神輿にお遷りになると、氏子青年が白丁を着けて神輿をかつぎ、神職や警護役が供奉し六浦にむけて出発します。兵隊検査を受けた青年(つまり二十歳)が神輿をかつぐことになっていたそうで、以前、瀬ヶ崎西部の総代をされた長瀬卯一さん(出身は瀬戸町内)がかつがれたのが最後で、それ以後は戦争の激化により渡御がなくなってしまうたとのことです。

この神輿に、瀬戸の山車がお供をして六浦との境まで送り、一方、六浦の屋台が迎えに出て、神輿は六浦の仲町に設けられるお飯屋に入られます。この間、道筋の家々ではキュウリその他を神輿にお供えしたのだそうです。そして神輿は、そのお飯屋に七日間お留まりになります。

お飯屋に入られて三日目の晩に行われるのが三ツ目神楽です。三ツ目神楽については別項で詳しく述べることとなりますが、今日では神輿がお飯屋に留まることなくなりましたので、瀬戸神社境内の神輿庫をお飯屋代わりとして、境内で行っていますが、本来は、六浦のお飯屋で行うものでした。

七月十四日は還御祭となります。神輿は六浦のお仮屋を出発し、これに瀬戸・六浦の山車・屋台が従います。川・大道・三艘と五ヶ町を一巡し、順次これに各町の山車・が付き従い、夜になるとこれに提灯を点し、それぞれの屋台がお囃子を競いつつ、深夜になつて神社に到着しました。

神霊を御本殿にお遷ししおわると、吉例の七つ締めの手打ちにより散会となりますが、屋台が地元町内へ戻るころには、夏の短い夜が白々と明けてくることもあつたと聞いています。

三ツ目神楽の笹だんご

天王祭にはキュウリのお供えがあつたと先に述べましたが、これとやらんで、三ツ目神楽のおりには「笹だんご」が氏子の有志の方々により競つてお供えされました。

「笹だんご」の作り方は、まず新芽をふき始めた清らかな新笹を三本用意し、これに粳米の粉を二分して一方には紅を加えて練り、紅白の団子を作つて蒸かしたものを、さながら花の咲くように枝ごとにもぎり付けるというもので、笹の根元を白紙で包み、水引を掛けて神

前にお供えされました。三ツ目神楽が終了すると、笹の小枝を折り分けて参列者に授与されました。戦後も、昭和三十年代までは室ノ木の御出身で大道在住であつた田島さんが永年にわたり「笹だんご」の奉献をされておられます。



戦後の天王祭復興

戦争が激しくなることで跡絶えた天王祭の神輿渡御も、戦後になると復活します。

瀬戸神社に残る記録では、昭和二十一年の書類が見当たらないので、この年の渡御があつたかどうか不明ですが、昭和二十二年の記録(磯子警察署長の許可書類)によると、御旅所は省略されていますが、概ね戦前の五

ヶ町を廻る順路で実施されています。

瀬戸神社を出発した神輿は、国道南下し、関東瓦斯会社前で折り返して、六浦ガードに戻り左折、六浦を通り、大道橋で折り返し、川町内を通過して三艘集会所まで進み、ここでも折り返して川町内に戻り、六浦を経由して瀬戸に帰るといふ順路が示されています。

これに続く、昭和二十三年の記録では、これに南川・高谷・内川なども加わつた順路になり、五ヶ町だけでない新たな町内の追加がなされ、これ以後、渡御の順路が次第に長くなつてゆくこととなります。

昭和三十年代の天王祭

天王祭巡幸順路の町内の数も増え、順路が長くなる人と人がかついでの渡御が難しくなり、昭和三十年代になると牛車を製作し、神輿をこれに載せて牛に引かせての巡幸が行われました。総代は羽織袴で花笠をかぶつて供奉し、神輿の前には錦旗や五色の真榊が加わるなど、厳かな行列でした。

昭和三十五年の巡幸渡御時間表によると順路は以下のようになっています。

瀬戸神社	発	午前九時
六浦	着	九時二十分
塩場	着	九時三十分
川	着	十時十分
大道	着	十時三十分
大道西	着	十一時
東川	着	十一時四十分
南川	着	午後〇時十五分
睦会友和会着	着	〇時三十五分
北辰神社	着	〇時五十五分
	発	二時二十分
三艘	着	二時五十分
高谷	着	三時十五分
瀬ヶ崎西	着	三時四十分
瀬ヶ崎東	着	四時二十分
内川	着	四時五十分
六浦南	着	五時二十分
瀬戸神社	着	五時五十分

この牛車による壮麗な行列の渡御は、見事なものでした

が、数年で終了しました。それは、牛や馬を使用する農業がトラクターなどの機械化農業に変化し、牛車を曳く牛の手配が困難になってきたことを始めとして、主要道路がモーターゼーション普及とともに、ゆったりとした行列の渡御が困難になってきたこと、また、近隣の宅地開発が進んだのに伴い、高舟台、瀬ヶ崎台、月抜、八景台などの坂道の上の町内が加わったことなど、複合的な要因によるものでした。

そのため、牛車は残念ながらしまわれたままになり、トラックに神輿を載せて全町内を巡幸する事がしばらく続けられました。

金沢扇会の結成と神輿渡御の再興

昭和五十三年、トラックによる巡幸の最後の宮入りだけでも神輿を昔のようにかついで行なうこととなりました。柳町から八景東町内を経由し神社までの部分です。

これは、瀬戸神社神輿保存会として金沢扇會が結成され、同会を中心に多くの神輿保存会・同好会の人数が結集されることにより可能になりました。

これ以後、しばらくは柳町・瀬戸間が神輿に肩を入れた渡御巡幸となりました。

この間、午前中はトラック巡幸としても、午後の時間をすべて担いでの渡御にすることが研究・提案され、昭和五十七年には西大道を出発し、宮入までを担いで渡御することが実施されました。

ついで、翌昭和五十八年には川町内、相川邸前を出発して、三艘、高谷、内川、瀬ヶ崎東西、そして柳町から瀬戸へというコースがとられ、さらに昭和五十九年には、相川邸から東川、月抜と一部トラック搬送を混え、南川からは三艘、南六浦、柳町、瀬戸を順路とするコースがとられることとなりました。

それ以後、西大道を出発とする「第一順路」、川町内（相川邸）を出発とする「第二順路」、南川町内を出発地とする「第三順路」が設定され、三年おきにこのコースを繰り返すことが行われてきました。

天王祭の現況と今後

この形式の巡幸が行われるようになって、平成十三年は二十年目になりますが、今後の天王祭の在り方も踏

まえ、順路や渡御方法の再検討も必要な時期とも思われます。平成十三年はこれまでの順番では「第二順路」の川町内出発となるところですが、新たな試みとして瀬ヶ崎東部町内出発のコースがとられました。今後とも各町内関係者の皆様のご意見を伺いながら、より良いものへの検討を重ねたく考えております。

三ツ目神楽

さて、瀬戸神社の天王祭の三日目の夜、「三ツ目神楽」という神楽が行われます。

昔は、六浦の御旅所で行われましたが、現在は神社の境内の、神輿庫の前で行われます。

大きな御釜に熱湯を沸す湯立てを伴う神楽で、「鎌倉神楽」「職掌神楽」あるいは「湯花神楽」とも呼ばれます。

古く、鎌倉の鶴岡八幡宮には「職掌（しきしよう）」とよばれる社家があり、この職掌が伝承する神楽であったことから「職掌神楽」の名があるのです。

職掌の神楽のことは、鎌倉幕府の記録である「吾妻鏡」にも記載されていて、鎌倉時代から伝わる神楽であ

ることは明瞭です。職掌の家柄のひとつである宮司の佐野家が今日も伝承、奉仕しています。

その所作は、里神楽のような演劇的な物語性を持ったものではなく、四方の諸悪を言向け鎮める御祭神の御神徳を表現したもので、天下泰平、万民和楽を願い、氏子一同の平穩、息災と隆昌繁栄を祈るものと言えましよう。

演奏には笛・太鼓（大胴と締め太鼓）が使用され、これに舞人の四名が必要です。（演目により舞人が二人になるものもあります。）笛、太鼓の曲目としては、「乱地」「拍子」「三つ拍子」の三種類があり、これが舞に組み合わされます。

今日行われる演目は以下の通りです。

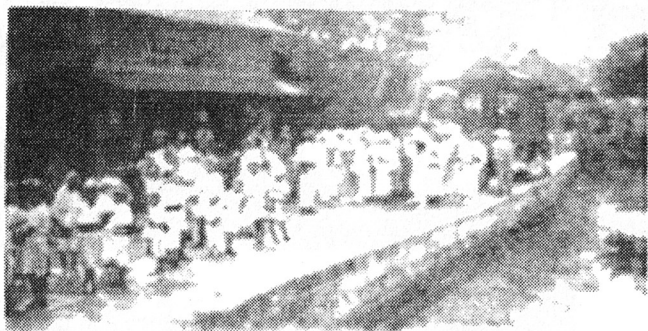
一、羽能（はのう）

始まりの神楽。扇に米をのせて舞い、四方に米の打ち撒きをします。

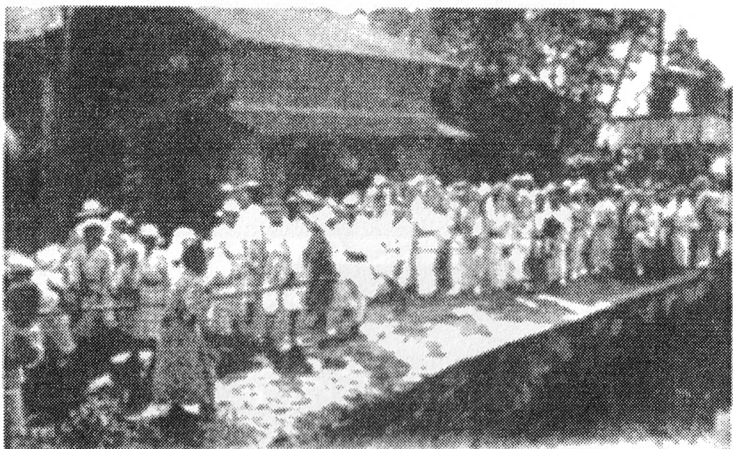
一、お祓い・祝詞（おはらい・のりと）

天地人の祓えのち、湯立ての釜を清めます。神前にもどり、御幣を捧げもって祝詞（微音暗唱）を奏します。

各町内の祭礼風景



川町内の屋台



瀬戸町内の屋台 (桃太郎人形)



六ッ浦町内の屋台

一、御幣招き(いいまねき)

御幣を捧げ持って舞います。御祭神の神霊をお招きし、神威の発揚を表現したものと申せましょう。

一、掻湯(かきゆ)

御幣の串を釜に入れ、湯を掻き回します。この時、お湯がよく煮立っていると、回転する釜の湯の中央に沸騰した泡が噴水のように立上がりまます。これを「湯花が立つ」といいます。大きな湯花が立つと、吉兆であるとされます。

一、射祓(いはらい)

弓矢による四方の祓いです。諸悪を退散させる御神徳の力強さの表現でしょう。

一、湯座(ゆぐら)

笹の手房を湯に浸し、参列者に湯しぶきを振りかけます。この湯を浴びると無病息災と言い伝えられます。

一、剣舞(けんまい)

猿田彦面(天狗面)を付けての最後の神楽。鉾で四方を言向け、呪文を奏して終了します。

参列者たちは神楽終了後、御幣・弓矢などの神楽道具を持ち帰り、家内安全のお守りとしたり、お釜の湯を飲んで無病息災を祈願するのが古来の習慣です。

毎年、七月九日またはその前後の火曜日の午後七時より行われますので、おそろいでお詣りください。



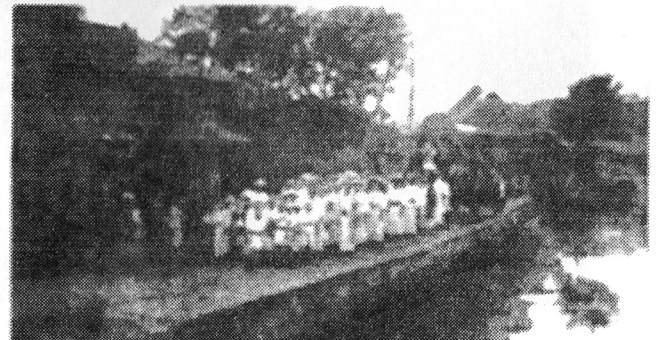
室ノ木町内の
舟屋台



瀬ノ崎町内の
屋台



三艘町内の
屋台



大道町内の
屋台

川町内会

か組



はじめに

「この内容は瀬戸神社天王祭(五ヶ村連合祭り)についての記録です。余談として屋台や祭りに関係したことも載せました。殆んど父の記憶によるものですが私の記憶もとり入れてまとめてみました、文章等まことにおぼろしいですが例えなんでも記録しておかなければ昔のことなど全く不明になってしまいますので綴ってみよう」と云う気持ちになった次第です。」

昭和五十七年十月一日

六浦川町内会中里健次郎著

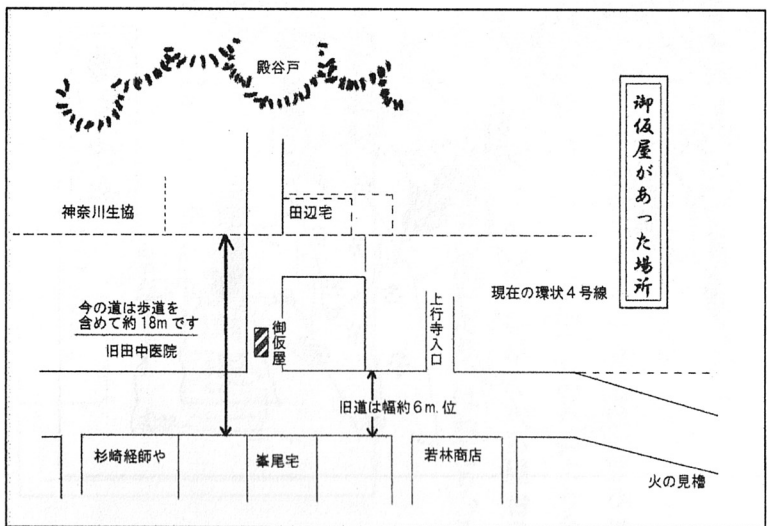
中里彦一著

天王祭の日程

私達の住む六浦全体の氏神様は瀬戸神社です。この神社は治承四年(一一八〇年)鎌倉に幕府を開いた源頼朝が伊豆の三島明神を当地金沢に遷祀してからは瀬戸三島大明神と呼ばれるようになりました。お祀りし

である神称は大山祇之命(オオヤマツミノミコト)、素戔嗚之命(スサノウノミコト)のほか十三柱です。特に素戔嗚之命は神話で有名な八頭岐太蛇を退治した勇猛な神で別名を「天王様」と申し上げています。今から約百三十一年前の安政六年頃から六浦の町には天王祭又は巡幸祭と呼ばれた祭典が年に一度盛大に行なわれてきました。よく話題になる五ヶ村の連合祭りのことで、その昔、どなたが企画してまとめたのか諸記録が見当たらないので不詳ですが、天王様に無病息災五穀豊穡の御守護を願う祈願祭であり又、人間社会が平和で争いのないよう親睦を計ることが、目的であったことは云うまでもありません。

祭りの順序として七月七日に瀬戸神社に納められているお神輿を各村から選ばれた若衆十五人余りが担いで六浦村のお仮屋に安置します、大勢の人達がお仮屋に参拝したものです。

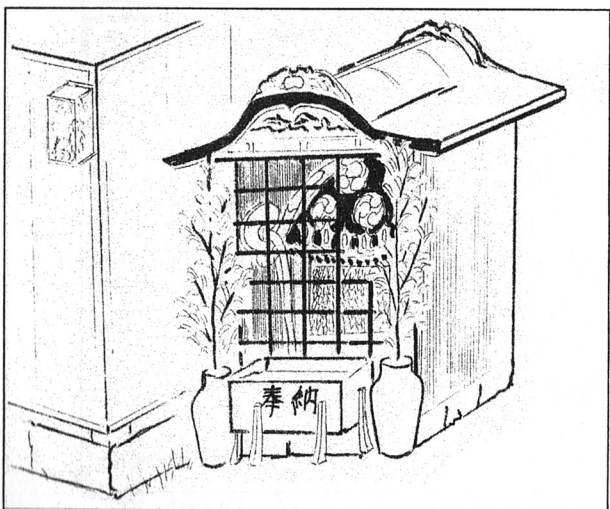


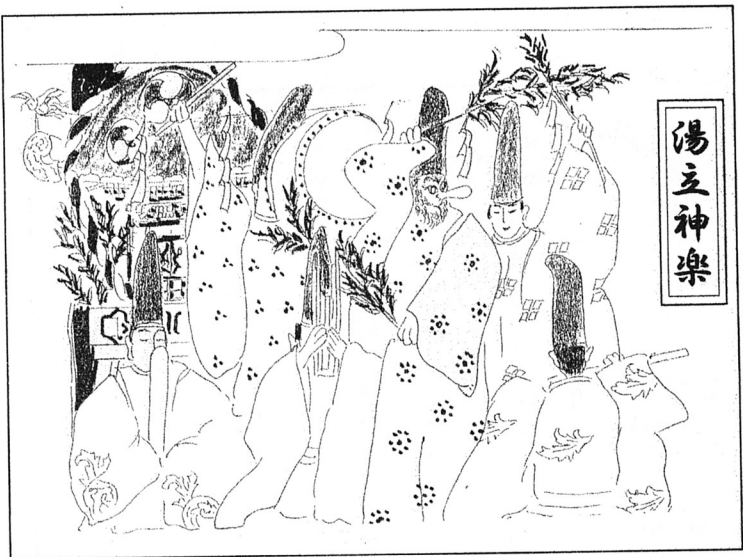
明治三十七年頃迄は、五ヶ村の屋台がお仮屋附近に勢揃いし、木やりや囃子をやり自らお神輿をお迎えしました。その後、廃止になりましたが、私も五、六才の頃、祖母と見に行つたことをかすかに覚えています。

又、七日からかぞえて三日目、つまり九日には三ツ目神楽という行事が瀬戸神社の神主さんのもとより近所の神社の神主さんもまじえ六、七人位がお神輿の前でデンデン太鼓にショウの笛、天狗の面なども用い、舞を演じました。そのほか湯立の舞と云う神楽がありました。神主さんが大釜にいっぱい湯を沸しその湯の中に榊の枝をひたしそれを持つてお祓いするように舞う神楽です、お仮屋があった場所は、今の六浦原宿線の中央当り、六浦睦の生協近辺です。昔の道は片側で約六米内外でした。(火の見下より京急ガード迄は昔のままの道です)現在は、道路拡張で約三倍拡がり歩道を含めると十八米位になります。

御仮屋

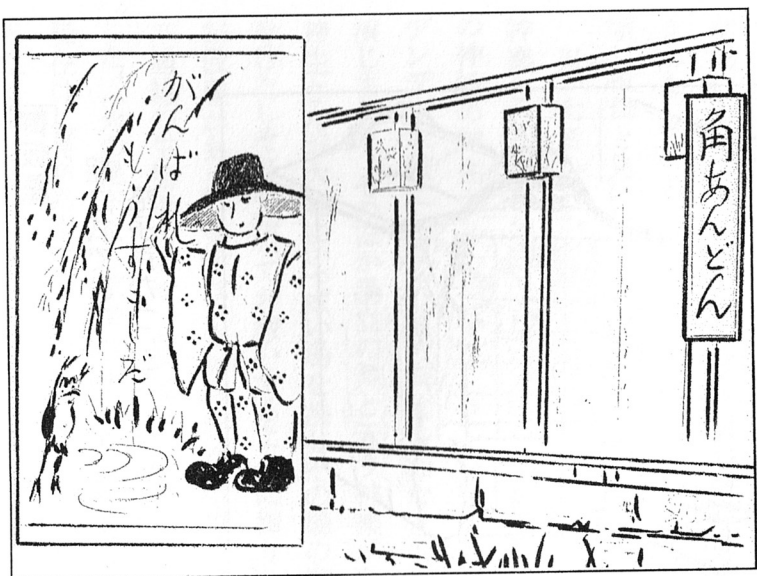
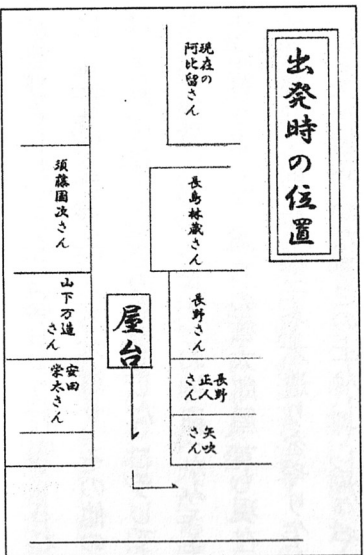
組立式でいたづら防止のため格子戸がついていました。





連合祭

いよいよ七月十四日連合祭の当日です。この日ばかりは、小学校も祭日扱いで休校と云う熱の入れ方です。村の人達も殆んど参加しました。主体は青年会で、役員の手引により、よく統制がとれた会員は、諸準備に精を出しました。年寄りが、万事ぬかりのないよう会長にいろいろ指示します。小若連は朝早くから屋台の周りに大勢集まりガヤガヤと、飛んだり、はねたり、それは、それは、嬉しそうでした。



午前九時半頃、村の役員さん等の挨拶がありお神酒をいただく若連は各々の部所につきます。引出の柏子木が響き渡ります。

チャキ・チャキ・チャキ・

間もなく年寄りによる木遣り(手古)が上り、つづいて威勢のいい胸のすくような囃子(やたい)が始まるといよいよ引出です。若連も小若連も揃いのはんてんを着て大綱を握り、イーチ、ニイーノ、サンの掛声で屋台を引きました。当時は砂利道で凹凸多く、屋台はガタガタ、ミシミシ、屋台にのっている人、中でも笛方、踊り手は注意しないとふり落とされる危険性もありました。この時刻は十時頃でした。屋台が今の山口酒店前まで進むと相川文五郎邸の十字路に三双の屋台とその一団が囃子の音も高らかに姿を現し、諏訪の橋近くに大道村の一団が現われます。そして川の屋台が相川藤兵衛さん前まで進んだ時に、この道路上に三双、大道と

三台が並びました。三台の屋台より打鳴らされる囃子、近くに、遠くに、きこえてくる木遣り、その他の雑音でそれは、それは、賑やかなものでした。こうして六浦村に入り、お仮屋におわします。お神輿(かみさま)をお出迎えに行きました。瀬戸の桃太郎屋台も現在の旧道入口の若林商店前にて囃子や木遣りをやり乍ら待機しています。にぎやかな事この上なしでした。やがて各村の屋台は毎年きめられた場所に移動し、役員はお仮屋に集合し神主さんによる御巡幸の式典がとり行なわれます。式が終了しますと約三、四〇分の休憩がありました。

六浦村に於ける各村の屋台の駐車場所

川は、今の六浦信用金庫前。

三双は、松兵衛荘(小泉彦太さん)種や前。大道は、いずみや洋品店前。

瀬戸は、お仮屋の前。

で一生懸命引きます。子供達の力が随分と役にたったようです。勿論手古舞の皆さんのお骨折は、又々、大変だったことは云うまでもありません。

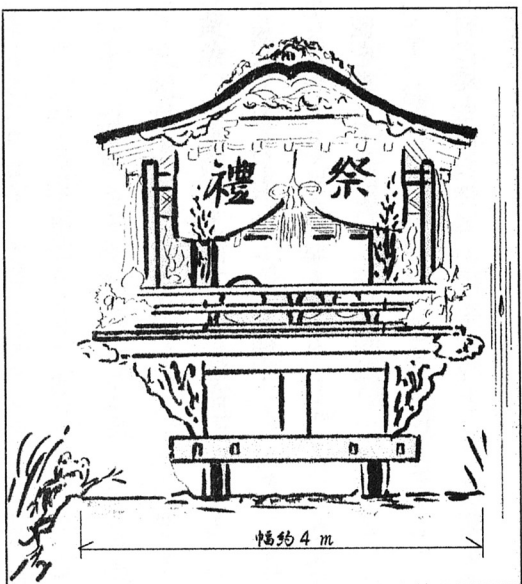
一行は川村へ進みます「榊だし」が遙か前方七十米位の所にいます。この「榊だし」は「六浦村」の所属で巡幸祭の露払役ですから、いつでも巡幸の最先頭に位置していました。ただ自動車が進みません。引綱に掛った小若連今のように警察官や消防団員による交通整理の姿などなく危険性もありませんでした。引綱に掛った小若連も黄色い声を張り上げて一生懸命引きます。この「榊だし」素朴ながらも、何となく神々しくお祭りムードを昂めた脇役としての価値も充分でした。村人たちは、この一枝を貰って玄関口に飾り悪魔除けのお守りにしたものです。お神輿は行列の一番後尾につきました。つまり各村の屋台はお神輿の御案内役と云う意味があったようです。

六浦は、お仮屋の右隣り田辺方前。
この休憩時間中、大人達は村内の親類や知人友人宅によばれ、酒肴のもてなしを受けました。どこの家でもこのようなお客サンでたいへんだったようです。

十一時頃になると六浦村による「寄せ」のふれ太鼓(そろそろ出発しますから位置について下さいの意)がドンドンドンと打鳴らされ、ややおいて、川村による出発の柏子木が響きわたります。六浦村の「榊だし」が出発しますと、先頭の川が木遣りをあげ、囃子が始まると三双・大道の順に同じ行動に入り、川が引出しに入ります。屋台と屋台との間隔は約五、六十米位いで、囃子や、木遣りの音声が交錯し、そのにぎやかなこと、行列の素晴らしきこと、ひとくちに云いあらはせないものがありました。屋台は、方向訂正のため時々停まります。どこもかしこも砂利道でしたから運行は大変な労働でした。引綱に掛んだ小若連は、一、二、三、の掛声



本体は五尺四寸位の大きさに四輪台上には直径十五糎(センチ)位もある大榊に沢山結ばれた「オンベロ」そして五色の布地が付けてあり二、二人で運行します。



この御巡幸の際、お仮屋より担ぎだす担ぎ手を一番手と云い、出発地六浦村の六十才位の人達により担がれ、川村にタッチします。人数が足りないときは、勿論応援がです。つまり主力が六十才前後と云うことです。川村より大道村迄を二番手と云い五十五才前後の

人によって担がれます。大道村より三艘村迄を三番手と云い五十才前後の人々により担がれる訳です。つまり段々と主力が若い者に引継がれると云う内容です。そして、最終の瀬戸神社拝殿に納められる時は、この年に定年で青年会を脱退した人達により担がれると云う仕組です。各村では十五才になると半強制的に青年会に入会させられました。そして満三十五才で脱会しました。青年会はいつもよく協力して村の諸行事につくしたものです。川村に進んだ行列も、先頭の川が、広田足袋屋(今の小野方)前迄くると、行列は皆村内に入ったこととなります。各村の屋台は毎年きめられた位置で止つています。狭い仲通り、太鼓の音が民家のはめに反響して囃子手には、聞こえないようなもう大変な音です。

お神輿が川村に入ります。一番手の六浦村の六十才前後の人達により担がれているのですが、老いても益々、元気一杯、暴れに暴れて中々納まりません。お神輿が

納まらないうちは屋台の囃子はやめられない規定になっていましたので、役員も気が気ではありません。ついに神主さんの手により納められ休憩に入ります。

*川村に於ける各屋台の休憩所

川は広田足袋や前現在の小野さん。

三艘は伊勢や前現在の阿比苗さん。

大道は鍛冶や前長野勝五郎さん。

瀬戸は山口酒店前。

六浦は私宅前中里。

各村でのおみこしの御休憩所は、町内会館がなかった頃は組長宅(町内会長)でした。そして「おみこし」が組長宅や町内会館で台上に納まるまでは、囃子をやめてはいけないと云う細かい規定がありました。大勢の人達は例の如く知人宅等に吸込まれていきます。あちこちから大きな歌声や笑い声がきこえてきます。まさにお祭り気分そのものです。年に一度、五ヶ村の人々が各村々

でお互いに親類知己友人を招待し、接待し例え僅かな時間でも笑顔で融け合うことこそお祭りの目的でもある親睦の意義があるのだと思いました。

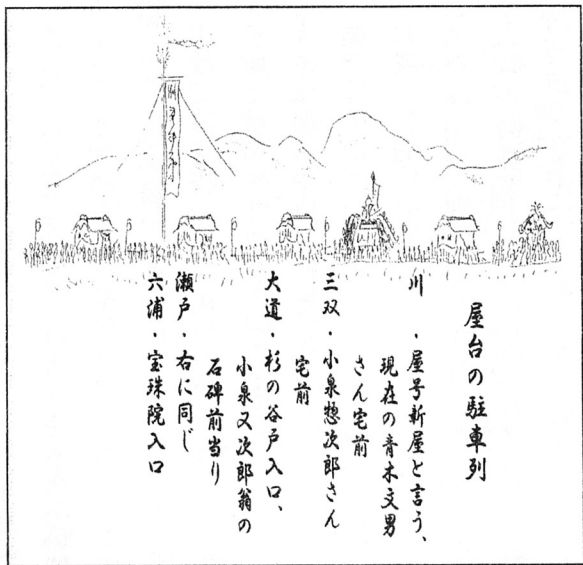
又、屋台が止ったそばの家でも茶菓子を出して呉れました。これには無邪鬼な小若連が大勢入りこみましてので、これらの家も大変だったようです。

招待を受けなかった人達は屋台の駐車場所の家で茶菓を出して呉れました。青年会はお祭りが終わってからお世話になった家にお礼の品を届けたものです。

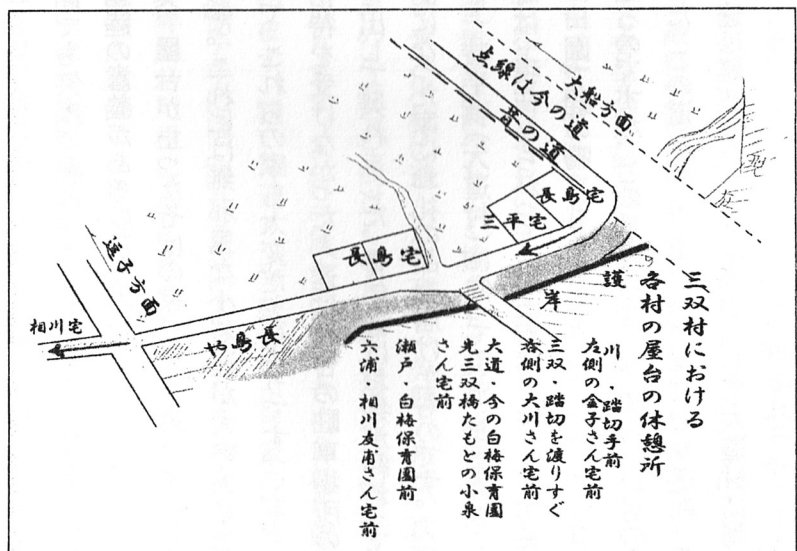
十一時半頃(大道村)に向つて引出しです。

当時は、現在とちがつて、道中至つて狭く(五、六米)両側は田園で蛙の鳴声もきこえました。この狭い道を行列が通るのですが、この景観も又、素晴らしいものがありました。この道も悪く、柔らかで車が潜り込み、手古舞の人達は難渋したものです。こうして大道村に到着します。

三十分ないし四十分位の休憩の後、大道村を出発、三双村に向います。今度は、長島屋さん前を通ります。当時は、この道巾四米強で凹凸多く柔らかく、手古舞係が大変でした。このようにして三双村に到着します。



屋台の駐車列
 川、屋号新屋と言う、現在の青木文男さん宅前
 三双、小泉惣次郎さん宅前
 大道、杉の谷戸入口、小泉又次郎翁の石碑前当り
 瀬戸、右に同じ
 六浦、宝珠院入口



ここで休憩ののち、各村々では屋台に提灯を取りつけ

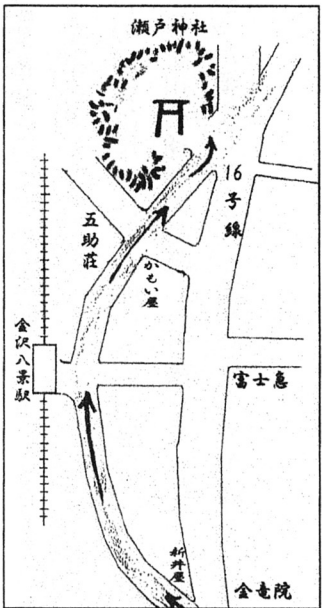
ます。但し、お神輿のチョウチンに火が入らない内は、屋台は勝手に火は灯されない規定になっていました。この当りから夜祭りが始まります。チョウチンに火のともった姿も又、格別で素晴らしいの一語につきるものでした。三双を出発、侍従橋を渡り、むつら村に向います。夏の夜も大分暗くなってきました。これにひきかえ、チョウチンがよく目立って奇麗でした。テンテンテンテン、ドゴドンドン、ピーシヤラーピーシヤラー一斉に鳴り響く囃子、子若達のオモチヤ花火が、そここでパンパン。パンパン。もう滅茶苦茶に、にぎやかで話しも出来ません。みなさん一生懸命でした。

瀬戸の屋台は屋上に桃太郎の人形が坐っていますが、この人形を川村通過の時降りし村で預りました。ビニールがなかった頃でしたので、夜露から人形を護るためです。

低学年の子供達はこの辺で解散させられました。

六浦村に入り、先頭の川が現在の京急六浦ガードの手前に来たところで休憩となり、各村の屋台は道路上一列にならびました。お神輿はお仮屋にて休みます。休憩は約三十分位と記憶しています。

いよいよ終点の瀬戸村です。国道に出ます。当時の道中は今の半分位で交通量至って少なく、アスルト補装でしたので、運行も多少は楽になりましたが、反面日中の炎暑で溶け、足袋や履物などにベッタリとつきまされたので、こまりものでした。この国道を一台の柵だしと五台の屋台、そしておみこしが一列状になる夜祭りの景は、ほんとに見ものでした。行列は国道から今もある旧道に入ります。そして八景駅の前を通り五助荘(今はありません)が地所はそのまま残っています(下を経て、かもし屋(長瀬忠造さん方)に達した所で休憩です。



各村の屋台の駐車所

* 川は、長瀬忠造さん宅前

* 三双は、石井金物店前

* 大道、瀬戸、むつら…と、殆んど接して駐りました。

ここで夕食です。各村々では用意してきた沢庵とオムスビで腹こしらえをしたものです。

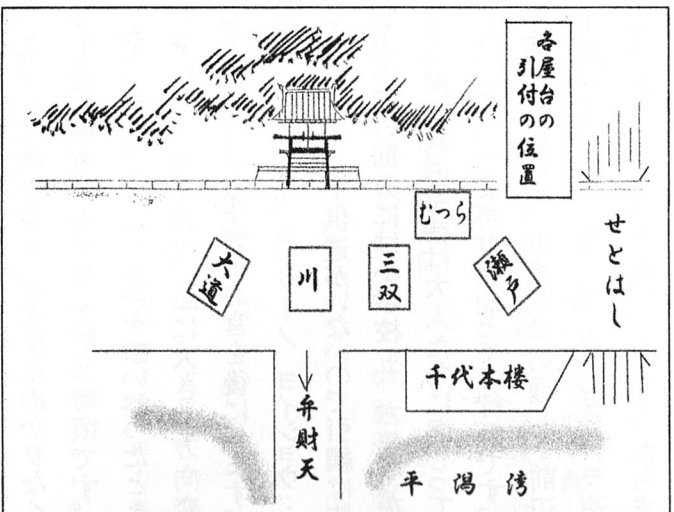
次はいよいよ瀬戸明神です。お神輿をお送りしお納めするのです。

川の屋台が鳥居の正面にくると、他の四ヶ村から各々五人位の若衆が屋台に集まってきて引付の木遣り（呼切）の応援です。このようにして次は三双、大道と：次々に応援したり、されたりして図のように所定の位置につきました。

各村では、ベテラン囃子方が腕をふるいます。勿論木遣りも最高潮です。実に見ごとな光景です。毎年このと乍らお神輿は中々納まりません。ワツショイワツショイワツショイ元氣いっぱいです。鳥居前から瀬戸橋にかけて何回も何回も行ったり来たり暴れ放題暴れます。見物人が多いので威勢が出るのも人情です。それも最後の七番手位になる三十五、六才の若者ばかりです。この時刻はもう十五日の午前二時頃です。神社の境内も境外も見物人でいっぱいでした。

ドンドンドンドンドンドンに神主さんによる納めの太鼓が打ち鳴らされます。これが鳴っては納めない訳に

はいきません。静かに拝殿に入り鎮座します。間もなく囃子も終り、ほんの僅かないつとき静かな状態になります。



間もなく区長さん、つづいて神主さんのご挨拶があり手打式に入り解散の運びとなりました。時刻は午前三時頃です。シーンとした状態です。坐り込んで眠っている人もいます。

こんな静寂を打破るような太鼓が六浦村屋台より叩かれます。（寄せ）の合図です。テン、テン、テン、テン、~~~~~、ドドン、ドドン、ドンドン~~~~~、

眠気が吹飛び大勢の人が動き出します。そして配置についた頃、川村による（引出し）の柏子木がチャキ、チャキ、チャキ、とケタタマしくなり響きます。木遣り「真鶴」があがります。ウーン、ヤリエー…となったところで囃子は、テン、テン、テン、テン、テン…と威勢のいい屋台のブツコミに入ります。このときの気分は爽快で忘れられません。木遣りは（手古）に入り（三番）が歌い終わったときガツン…と約一尺位進みます。この瞬間が、又、素晴らしい気分でした。つまり引出しのお印で毎年この

と乍ら、この一尺前進を手古舞係はぬかりなくやりとげてきました。時刻はもはや午前三時頃です。木遣りは、「さんしょ」にうつり（一番）を歌い終ったときにお宮に對面していた川の屋台は、左に大きく方向変換します。そして（二番）目の中頃でお宮を後にします。まだまだ、大変な見物人です。ヨッサノ、ヨイショウ……と掛声で屋台を押します。子供達がいないので引綱は使いません。屋台上の前の部分には小学校五、六年生が大勢乗っています。高等科の生徒は大人たちに混じって屋台を押ししました。新氣一変再び張切つての行動です。三艘、大道、六浦と続きます。木遣りは切通し手前辺りで中止し囃子だけとなりました。ガラガラガラ速度の速いこと、とにかく早く帰りたい一心です。たちまちのうちに六浦村を経て堤みの橋現在の川郵便局辺りにさしかかります。時々休んでいた囃子も木やりにも誘われて、又にぎやかになります。道路に面した家々では「屋台が

帰ってきた、帰ってきた」と迎えてくれましたが僅かな人数でした。みんなが疲れ果てているからです。屋台は屋台小屋に直行します。この間に三艘が通過し大道が仲通りを経て帰りました。屋台を納めた一行は出発地の長島林造さん方前に集まり役員さんの解散の挨拶を受けお神酒をいただくのですが、このお酒を口にもっていく人は殆どいなかったようです。ほんとに御苦労なことでした。

青年会はお祭りの後始末が、又々、大変でした。幟の倒し方、幟り枠の掘り方、これらの所定の場所への収納や太鼓の縄解き屋台の飾りつけの大もの小もの整理等、やることは山ほどありましたが、よく一致協力して毎年毎年よくやってきました。そして、後祭りとも云うべき鉢洗いを盛大に行いました。この鉢洗いは、ドイツ、ジंक、流行歌、などドンチャン騒ぎをしたものです。

千代本旅館には、毎年、浅草や神田辺りから金沢の

祭りをみるため泊り客があつたそうです。

昭和十一年の連合祭は最後の連合祭だっただけに上級クラスの小学生も多く参加しました。私も六年生でした。

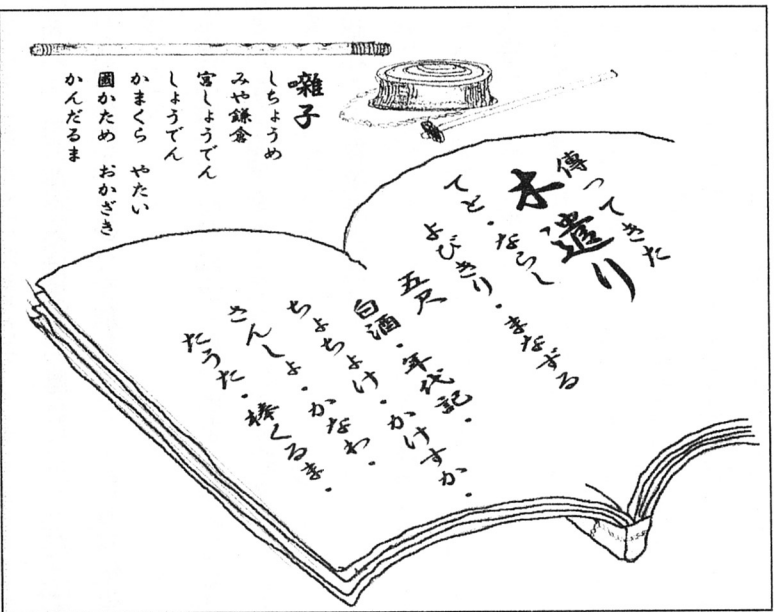
以上の内容は当時の記憶と思ひ出を呼び起しそれに経験豊かな父の話を多く取り入れて一応文章にしてみました。

昭和五十六年三月三日

中里彦一著

木やりと囃子について

私の祖父七左衛門が現在の港南区日野町まで山越しに何日か通い習い覚えたことを祖母より私が直接ききました。祖父は長男の梅吉に教え、継ぎ広めていったそうです。稽古場は始めのうちは私方でやっていたとのことですが人数の関係から千光寺、光伝寺又は火の番小屋などで行なったようです。三浦方面の一部の町内の囃子が川村と殆ど同じと云うことです。同町出身者の話によると、その昔、金沢より習ったのだと年よりから、きいたことがあります……と云うことです。只、残念ながら私が生まれた明治三十二年には、すでに他界してましたから詳細はわかりません。



代々の囃子方…敬称略

- 中里七左衛門・木遣り囃子の師匠
- | | | | |
|-------|--------|-------|-----|
| 相川萬吉 | 大バチ | 安田藤吉 | 笛 |
| 長島与兵衛 | つけ | 安田政吉 | 笛 |
| 大木宮次 | つけ | 中里己之吉 | 笛 |
| 中里梅吉 | 笛 | 長野松太郎 | つけ |
| 安田庄吉 | 笛 | 安田源三郎 | つけ |
| 相川豊吉 | 大バチ | 長野恒吉 | つけ |
| 山下八十八 | 大バチ | 長野儀三郎 | つけ |
| 須藤平次郎 | 大バチ | 安田政吉 | 大バチ |
| 長島仙蔵 | つけ | 長野覚蔵 | かね |
| 長野勝五郎 | 笛 | 城田重太郎 | かね |
| 長野六蔵 | 笛大バチつけ | 須藤順蔵 | つけ |
| 長島虎之助 | つけ | 須藤喜代治 | つけ |
| 長野儀助 | つけ | 安田義三 | つけ |
| 須藤清之助 | 大バチつけ | 長島健作 | つけ |
| 相川悌次郎 | 大バチつけ | 長野一郎 | つけ |
| 城田良造 | 大バチ | 中里彦一 | 大バチ |
| 長野春吉 | 大バチ | 山下敏一 | 笛 |
| 中里健次郎 | つけ | 渡辺重夫 | 笛 |
| 三平包吉 | つけ | 安田五郎 | 大バチ |

代々の木遣り師…敬称略

()内は屋号

- | | |
|----------------|---------------|
| 中里七左衛門(治郎エムザン) | 相川徳太郎(中店) |
| 大木治五門(東ノ内) | 長島為蔵(柳ヤ) |
| 川崎与左五門(ヨザエムザン) | 安田善三郎(ユヤ) |
| 長野松兵衛(トオフヤ) | 長野伊三郎(下舟) |
| 須藤久工門(セド) | 須藤清之助(イドバタ) |
| 山下忠左五門(ヲシヤカ) | 長野伊三郎(下舟) |
| 須藤友吉(イドバタ) | 須藤 茂八(セド) |
| 長島又蔵(スシヤ) | 長島勝太郎(インキヨ) |
| 須藤峰吉(久エムザン) | 須藤延太郎(才茶ヤ) |
| 長野吉五郎(ワタヤ) | 長島作次郎(ツケギヤ) |
| 長島販六(柳ヤ) | 小泉治郎吉(ハシモトヤ) |
| 長野幸蔵(トオフヤ) | 渡辺五郎吉(左官ヤ) |
| 川崎辰次郎(ヨザエムザン) | 長野音吉(タテグヤ) |
| 長島万吉(インキヨ) | 長島峰吉(コオヤ) |
| 須藤庄八(フジイ) | 安田元次郎(カド) |
| 山下伊之吉(イセヤ) | 長島嘉一(トオフヤ) |
| 安田茂八(ヤト) | 安田伊三郎(ユヤ) |
| 長島嘉助(トオフヤ) | 長島林蔵(スシヤ) |
| 大木卯之吉(桶ウノザン) | 中里健次郎(治郎エムザン) |
| 長島健次郎(ツケギヤ) | 安田太七(ヤト定ザン) |

城田孫太郎(タビヤ)

長島忠次郎(ツケギヤ)

- | | |
|---------------|---------------|
| 須藤伊之吉(西ノ内) | 山下常吉(ヤトセイザン) |
| 中里彦太郎(治郎エムザン) | 山下万造(ウナギヤ) |
| 長野 平造(タテグヤ) | 中里政吉(治郎エムザン) |
| 安田 兼吉(シミズヤ) | 須藤良造(フジイ) |
| 山下清次郎(ヤト清ザン) | 山下菊次郎(ヤトセイザン) |
| 山下忠三郎(ヲシヤカ) | 長野一郎(ワタヤ) |
| 大木直太郎(ヤオヤ) | 長島彦太郎(ツケギヤ兄) |
| 山下 熊吉(七五郎ザン) | 長島平吉(ツケギヤ弟) |
| 渡辺伊之吉(左官ヤ) | 安田栄太(テイザン) |
| 安田 兼松(下ノ家) | 渡辺正治(精米所) |
| 須藤平次郎(才茶ヤ) | 須藤功(西ノウチ) |
| 中里 浦吉(治郎エムザン) | 大木半次郎 |
| 長島 善吉(シミセ) | 大木忠次郎 |
| 安田甚太郎(テイザン) | 安田幾次郎(カド) |
| 小泉 富造(橋本ヤ) | 須藤平次郎 |
| 長島太兵エ(インキヨ) | 長島 清吉(コオヤ) |

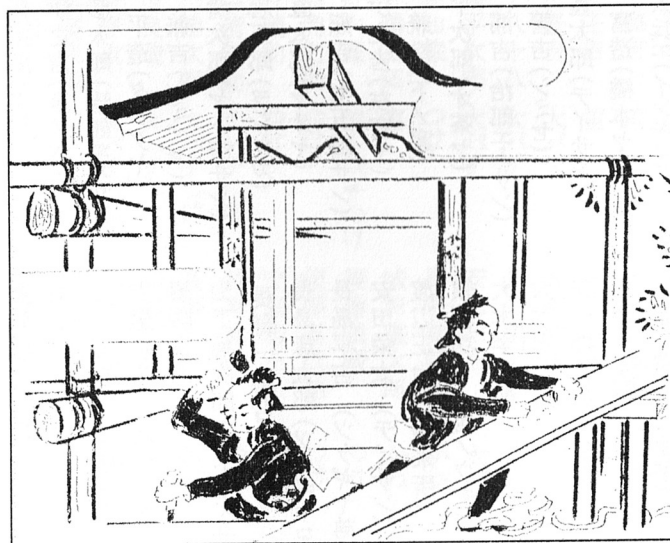
屋台の建造について

私の父健次郎の祖母に当る産婆モヨは、天保十一年に三艘村杉崎家に生れ安政二年に十六才で中里家に嫁ぎ、大正十二年十二月に八十五才で亡くなりました。この時、父、健次郎は二十五才でした。

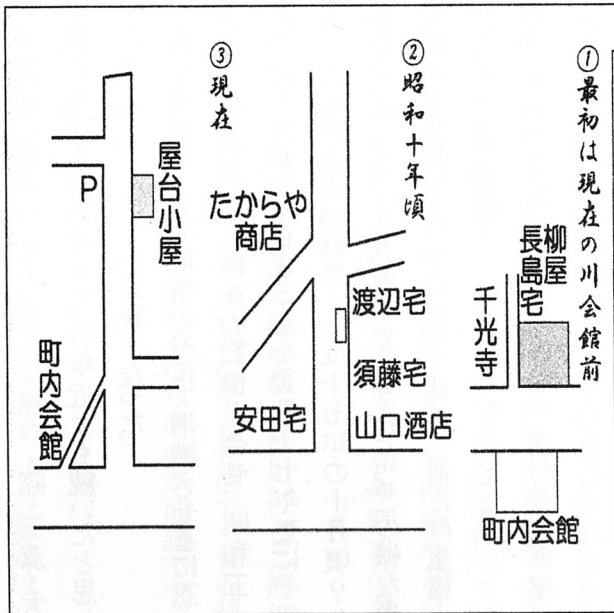
このモヨなる人が、孫の健次郎に昔話などいろいろ話してくれたため興味をもつて聞いた父が、何かよく知っていることもうなずけます。

話しによると、屋台の建造はしみせ(新店)現在の長島チカさん宅で行なわれたそうで、各家で順番に職人の茶菓子の接待をしたそうです。完成は安政六年とのことです。しかし、この大工、彫刻師の人達が何処より来たのか、どの位の費用を要したのか諸記録がないのは残念でなりません。

屋台の建造

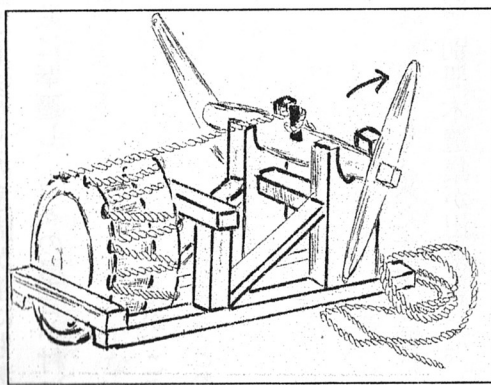


川町内屋台小屋の移りかわり



しやち

昭和二十五年辺りまでこのような道具で太鼓を締めました。馴れないと、いい音がでません。この道具をしやちと云います。二人〜三人で行ないます。昔の人の知恵には頭が下がります。馴れても一ツ約一時間かかりました。この点、今は楽です。



渡辺 正治

この記録は瀬戸神社の五ヶ村(瀬戸・睦・三双・大道・川)合同の天王祭が綿々二百年近くも続いたと思われるが、昭和十一年が最後となった。

これも当時の、人の記憶のみにて消滅させるに忍びず、中里彦一氏が父健次郎氏の記憶と合せ、昭和五十六年に集録したが、足らざる点を翌五十七年更に一冊を補足したものとされます。五十七年の十月頃？此の二冊を私に差上げると申して渡された。この様な貴重な記録を私物化するに忍びず、此の二冊には重複する箇所もあるので整理し一冊にまとめました。

七月七日の宵宮にお天王様を六浦村のお仮屋にお移し、三ツ目神楽から十四日の本祭りの行列まで、事細かな記録には敬服しました。

通例、天王祭は十四日の十二時までには終ることと

なっていたが、今回が最後だとの意識が誰にもあったのか、お天王様を社殿に奉遷し、方々の屋台が村に帰る頃は東の空が白んでいました。

当時、川村は五十戸ソコソコの小村でしたが、この大事業を他村に伍して毎年実行していた事を思うと参加者の誰もが胸の脹らむ思いがした事でしょう。

ここでお二人方について更に申し添えますと、中里健次郎氏は木遣の師匠として指導下さった方で、百年に亘り暗記の方法で唄い継がれて来た木遣を順に唄って裁き、記録にしたので別冊木遣集が出来ました。

又、彦一氏は囃子の大太鼓の妙手で、天王祭の事を後世に残したいの一心から、二冊目を昭和五十七年十月に書き上げたが日ならずして同年十二月に他界されたのですが、この作成中の心情を思うと涙する思いです、この様な方々とおつき合い出来たことを感謝しつつ筆を置きます。

平成十三年八月

瀬戸神社の天王祭についての追憶

天王祭について川町内に残る「天王祭の思いで、ほか一冊」(中里健次郎、同彦一共著)があるが、これとの重複を避けながら、昭和十一年(一九三六)が最後となった五ヶ村連合の天王祭について、他村の人達を含めて調べ、聞き得た言い伝えや、私の記憶や、其の頃残っていた物などから、主体が川町内になりますが推測などを含めて書きあげて見ましたが、足らざる点や訂正のお申しいでを期待いたします。

なお当時、氏子の部落にはそれぞれ川村、三艘村、大道村と村名を付けて呼称していましたので、昔の呼び名で書きますが、六浦村とあるは只今の六浦睦です。

天王祭の始まり

瀬戸神社の祭の中には夏祭りと呼ばれる記録はなく、其の始まりは二百年以上とも言われておりますが、後

に記載する祭りの引き物の変遷から判断する外はないのですが、其の頃瀬戸のお屋敷には米倉様が居られ、六浦の殿谷戸には有力な方々が居られた模様で、この天王祭が氏子の発意によるか、他の意向によるものかは判らないが、氏子の親睦を目的として農閑期の七月七日と十三日を宵宮、十四日を本祭りとして定め、指導者が呼び掛け人となり、後半は村長がこれに替った次第で、祭りの終りに鳥居の前で村長が終りの挨拶をし、氏子が八ヶ村であったが七本締の手締で終わりました。

また祭りの目的とされた氏子の融和と親睦の意図については数多くあったと思いますが、一部後記の約束事らしきものの中に見受けられます。

五ヶ村合同の天王祭(巡行祭とも言った)

五ヶ村合同の天王祭の起源は遠く明らかでないが、毎年七月七日と十三日を宵宮、十四日を本祭とする

巡行祭が行なわれた、川村は鎮西八郎為朝の山車、三艘村、大道村は屋台、瀬戸村は桃太郎の山車、六浦村は加藤清正の山車で行列を組み、お天王様ご先導し氏子の五ヶ村を巡行していた。

各村とも、引き物も、古くなつたので新調する話が出、川村は安政六年（一八五九）今の屋台が完成、三艘村は他から譲り受けた屋台、六浦村は屋台を新造、大道村、瀬戸村は新しいので其のままを使うこととして昭和十一年（一九二二）日支事変の勃発による巡行祭の廃止までの永い間盛大なお祭りが行われたのである。

瀬戸神社の氏子

氏は、川村、三艘村、大道村、瀬戸村、六浦村と室ノ木村、瀬ヶ崎村、高谷村の八ヶ村ですが、天王祭は川村、三艘村、大道村、瀬戸村、六浦村の五ヶ村と室ノ木村、瀬ヶ崎村、高谷村の三ヶ村が二組に分かれ同じ

日に別個に行事を行なっておりました。

（注）五ヶ村の名は天王祭当日の屋台や山車の隊列の順に書きました。

天王祭実施にあつたの約束ごと

この連合祭は村内の和合をはかるための祭りであるので統制上多くの約束がなされたと思うが、知り得たことを記します。

一、各村は識別として定められた鉢巻を使うこととされ、川村はウコン、三艘村はトキ色、大道村は白地に紺の染柄、瀬戸村は濃い赤色、六浦村は紫色、瀬ヶ崎村は赤色、室ノ木村は残念ながら不明です。

一、神輿には御祭神の須佐之男命が奉遷されているので、お天王様とお呼びする。

一、お天王祭の隊列は榊山車を先頭とし、川村、三艘村、大道村、瀬戸村、六浦村の順とし、榊山車で

村々をお祓いし、お天王様をご先導する。

一、各村にはお天王様のお休み所が一ヶ所づつ設けられ、各村はそれぞれのお休み所へ氏子の数に応じて定められた担ぎ手を派遣し、お休み所毎に担ぎ手が順次交替することとしたが、派遣に当ってどの村も高齢者から順に若者になるよう組まれていたので、どのグループもあまり年齢差の少ない人達の集まりとなり、親交の場としての配慮がなされたものと思われま

す。
尚、三五才までの者は木遣りか囃子を担当しているので三六才以上の人を担ぎ手の対象としていました。

一、担ぎ手の派遣人数は川村と六浦村は四名づつ、他は三名づつであつたようで、大正時代の川村は五十戸足らずであつたかと思ひます。其の頃「ムツラは大村で七十軒、セガサキヤ小村で十七軒」と唄われた戯れ歌を耳にしたことがありました。

一、お天王様の担ぎ手の装束は、どの組も純白の白丁を着て担ぐこととされているので、始めは静かな担ぎ方であるが白丁を御神輿の輪木やトンボに巻き付けるようになるると担ぎ方にも変化が見られ、又お休み所を重ねる毎に年若となるよう組まれているので次第に荒さを増した担ぎ方になっていました。

一、ご巡行中お天王様がお休み所に休まれる前に引き物の木遣りや囃子は止めぬこと。
一、夕刻、村々の引き物用提灯の火はお天王様の火入れを見てから行うこと。

屋台や山車など引き物の変遷

今、知る範囲で申しますと、昔祭りに使われた引き物は、現在使われている物、使われたという物などがあり、川村は鎮西八郎為朝の山車、三艘村は屋台、大道村も屋台、瀬戸村は桃太郎の山車、六浦村は加藤清正

の山車でした。

ある時氏子の中から、引き物も古くなったので新調してはと言う話がでたとか、そのことがあつてか、川村は現在の屋台、人呼んで根子の屋台を安政六年(一八五九)に町内の私宅の庭先で新造し、三艘村は明治九年(一八七六)に他所から譲り受けた幅廣な二階造りの屋台を改造し、六浦村でも今の屋台に替えましたが大道村と瀬戸村は従来そのままでした、しかし大道村では御簾が古くなったので嘉永元年(一八四八)江戸から購入したとの記録が其の保管箱に記載されております。

瀬戸村の桃太郎の山車は、高さがあつて昔は良かったことと思うが、道路の電線や樹木の枝などの障害物をサンマタで押し上げて曳いておりましたが、現在は梵天と称する台座の一部を取り除いて低くしております。

別に行事が行なわれた室ノ木村、瀬ヶ崎村の引き物については古い事は判らなかつたが、室ノ木村は船型に

車を付けた船屋台、瀬ヶ崎村は他村から譲り受けた屋台を使つていましたが、只今、船屋台の存在については知ることができませんでした。

又高谷村は槍持った加藤清正の山車で室ノ木村などと共に、三ヶ村で行事を行っていました。

思いついたまま

古くは知らないが、大正の後半から昭和始め頃の天王祭当日の村の様子を思い起すと、大きな幟が二本立ち、村の男達が御巡行に従い村を離れるので不時の出火に備えて仲通りに消防ポンプを始めマトイ、梯子、鳶口、など火消道具一式が立て並べられていた。

祭りの行事は戸主会から青年団が任されて、行事の一切を青年団が差配し其のひとつとして、村内男子全員が担当する役割表掲出されたが其の内容は、

一、留守居役

一、手古前

一、元網

一、木遣

一、囃子

だったと思うが、村内男子の誰もが祭りに参加することになつていた。

祭りに参加する者の身支度は、各村がそれぞれ毎年揃いの浴衣を新調し、手古前から子供にいたるまで全員が揃いの浴衣で参加したがどの村も木遣士は花笠を被り、更に思い思いの綺麗なタスキなどで着飾る人などがあり、暑さの中での見物人も楽しい時を過したようであつたが残念ながら昭和二年からは他村に倣い祭バンテンとなつた。

昔、瀬戸神社の近くには三軒の旅館があつたが、五ヶ村合同のこの賑やかな祭りを見ようとすると見物客でいつも満員だつたとのこと。

お天王様に人を乗せて担いでいるのを見た事が無いのでオトナに尋ねたら、重くなるからだと言われ納得した

が、昭和五五年鎌倉での開府五百年祭に神社の神輿も参加したが、この時は人を乗せて担がれた。しかし其の時、御神体は瀬戸神社に鎮座されており、空の神輿でありました。

木遣の導入

六浦川町に伝わる木遣りは、「天王祭の思いで」(中里健次郎同彦一共著)によると、安政六年(一八五九)現在の町内の屋台が新造されることとなつたので、これを期に町内在住の中里七左衛門氏を始め青年達が、当時の金沢道(谷津町より能見堂に登り尾根道の追分けで山を下り上大岡町、蒔田町、を経て保土ヶ谷宿に至る街道)により南区日野町方面から習い覚えたとなり山坂越えての多年のご苦労は如何ばかりかと敬服した

します。

(注)日野町、笹下町方面を調べたが親元は絶えて見当
らず。

木遣の種類

現在各地で唄われている木遣は多様であるが、主たるものは江戸の木遣と海の木遣で、江戸の木遣は江戸城築城の際作業唄として唄われ、海の木遣は堺方面から江戸方面への回漕船の乗組員が唄ったものと謂れ、歌詞も多く、当町のものは海の木遣と言われた。

(横浜市教育委員会 川口囑託談)

町内における稽古場と稽古の仕方

稽古場所の始めは、中里七左門氏宅であり、千光寺や光伝寺の本堂となり、昭和の始めからは新築され

た川俱樂部(現町内会館の前身)と移り、只今の町内会館となった。

稽古のやり方は天王祭の時屋台を曳きながら唄うものであると云う理由からか、すべて暗記の方法で節、歌詞などの一切の記録を許されぬため、床に八拍子の棒を引いて間を覚え、節や歌詞は、聞き耳立てて師匠の口元を見つつ覚えたものである、其の為、永年の間に子音が母音としてつたえられたりして歌詞の判断に苦しむケ所が時折り見受けられる。

編集後記

中田 勇一

平成十二年川町内会館において長年伝わっている横浜市無形文化財指定「川町木遣り」を渡辺正治先生よりご指導いただくことに成りました。そのご縁にて渡辺先生著作の「木遣り唄・音符解読書」の印刷製本を承りました。続いて木遣りの師で在られた中里健次郎・中里彦一師著「か組・天王祭六浦連合祭の思い出と余話」についても渡辺先生の編集で印刷製本を承りました。

先々代の故佐野庄三郎宮司の時に子供たちの、初参り・七五三・受験・厄払等、氏神様として参拝、お世話になってきたことのご縁。

また、瀬戸神社前宮司であられました故佐野大和先生には瀬戸神社神輿保存會金沢扇會の発会、十五年前の会社発足時のお祓い、等より先生の生前まで可愛がって頂いたことのご縁。

現在の佐野和史宮司には、「瀬戸神社こども宮相撲大会」の開催、そして、この「瀬戸神社の天王祭」の編集制作をすることでの話し合い等、神社を通じていろいろなご縁がありました。

今思うとこの数々のご縁は偶然ではないような気

がします。毎朝事務所にて、榊のお水をかえ、神棚に向かい拍手を打ち、今日一日のお願いをすると、頭の上から何か答えて頂いているような気持ちになります。(氏神様とのお話は、榊の葉を伝えてすると聞いた事があります)

地域の発展は、地域住民の方々が神社に向かい、一体になりお祭り(祀る)を行う事だとおもいます。ここにご紹介いたしました内容は、先人達が築いてきた「天王祭六浦連合祭」を氏子住民我々が何年先に行う事が出来ればと思ひ、冊子「瀬戸神社の天王祭」をまとめもつと多くの方々に読んで頂きたくつくりました。

いかがでしょうか、先人の方たちの声が聞こえるような気がしますが、「我々も参加するヨ」と。

尚、この冊子につきご意見等ありましたらお手紙にて瀬戸神社宛てにご連絡ください。

編集に御協力いただきました、瀬戸神社佐野和史宮司様、川諏訪社連木遣り保存會渡辺正治先生には誠にありがとうございます。

参考文献

か組六浦連合祭の思い出と余話 昭和五十七年

中里健次郎 中里彦一共著

天王祭の追憶

渡辺正治著

御協力

瀬戸神社宮司 佐野和史様

川諏訪社連 渡辺正治様

編集 平成十四年七月 一日

横浜市金沢区六浦四丁目十五番十七号

中田 勇 一

発行 平成十四年七月二十日

横浜市金沢区瀬戸二十一—三

瀬戸 神 社